

聖書の祈りが私の祈りになる（新約編）

第7章 キリストの生涯と働きにおける祈り⑥



ご自分とあらゆるクリスチャンたちのための祈り



ご自分とあらゆるクリスチャンたちのための祈り

かつて、ある新進気鋭のピアニストが巨匠パデレフスキから指導を受けたいと思いました。彼は弟子として受け入れられたものの、与えられたおもな指導は、巨匠の練習風景をじかに観て聴くという特権だけでした。しかし、このピアニストは、それでさらに練習に取り組む気持ちになれたのでした。ヨハネの福音書 17 章を見ると、私たちがまた「本物の主の祈り」に耳を傾けるといふ特権にあずかれます。祈りという営みについて最も実りある教訓と、さらに祈りたいという思いをいただくために、これ以上に有意義な形があるでしょうか。

キリストが大祭司としての祈りを捧げておられるのが（ヨハネ 17 章） どのような場面だったかについて、記録は残されていません。しかしながら様々な注解者がいくつかの可能性を示唆しています。それによれば、（過越の食事における）最後の晩餐の厳粛な時をこの祈りで締めくくられたと考えている人々もあり、弟子たちと神殿のどこかに立ち寄られた際に祈られたものではないかと考える人々もあります。実際にどのような場面であったにせよ、この祈りは、聖書の中でも最も重要な祈りの一つとなっています。イエスがその命を多くの人々のための犠牲として捧げられる時が間近に迫っていたのです。

「父よ。時が来ました。あなたの子があなたの栄光を現すために、子の栄光を現してください。……あなたがわたしに行わせるためにお与えになったわざを、わたしは成し遂げて、地上であなたの栄光を現しました。今は、父よ、みそばで、わたしを栄光で輝かせてください。世界が存在する前に、ごいっしょにいて持っていましたあの栄光で輝かせてください。……わたしは、あなたが世から取り出してわた

しに下さった人々に、あなたの御名を明らかにしました。彼らはあなたのものであって、あなたは彼らをわたしに下さいました。彼らはあなたのみことばを守りました。……わたしは彼らのためにお願いします。世のためではなく、あなたがわたしに下さった者たちのためにです。なぜなら彼らはあなたのものだからです。わたしのものはみなあなたのもの、あなたのものはわたしのものです。そして、わたしは彼らによって栄光を受けました。わたしはもう世になくなります。彼らは世におりますが、わたしはあなたのみもとにまいります。聖なる父。あなたがわたしに下さっているあなたの御名の中に、彼らを保ってください。それはわたしたちと同様に、彼らが一つとなるためです。わたしは彼らといっしょにいたとき、あなたがわたしに下さっている御名の中に彼らを保ち、また守りました。

……わたしは今みもとにまいります。わたしは彼らの中でわたしの喜びが全うされるために、世にあってこれらのことを話しているのです。わたしは彼らにあなたのみことばを与えました。しかし、世は彼らを憎みました。わたしがこの世のものでないように、彼らもこの世のものでないからです。彼らをこの世から取り去ってくださるようというのではなく、悪い者から守ってくださるようお願いいたします。わたしがこの世のものでないように、彼らもこの世のものではありません。真理によって彼らを聖め別ってください。あなたのみことばは真理です。あなたがわたしを世に遣わされたように、わたしも彼らを世に遣わしました。わたしは彼らのため、わたし自身を聖め別ちます。彼ら自身も真理によって聖め別たれるためです。

わたしは、ただこの人々のためだけでなく、彼らのことばによってわたしを信じる人々のためにもお願いします。それは、父よ、あなたがわたしにおられ、わたしがあなたにるように、彼らがみな一つとなるためです。また、彼らもわたしたちにおられるようになるためです。そのことによって、あなたがわたしを遣わされたことを、世が信じるためなのです。またわたしは、あなたがわたしに下さった栄光を、彼らに与えました。それは、わたしたちが一つであるように、彼らも一つであるためです。わたしは彼らにおり、あなたはわたしにおられます。それは、彼らが全うされて一つとなるためです。それは、あなたがわたしを遣わされたことと、あなたがわたしを愛されたように彼らをも愛されたこととを、この世が知るためです。

父よ。お願いします。あなたがわたしに下さったものをわたしのいる所にわたしといっしょにおらせてください。あなたがわたしを世の始まる前から愛しておられたためにわたしに下さったわたしの栄光を、彼らが見るようになるためです。

正しい父よ。この世はあなたを知りません。しかし、わたしはあなたを知っています。また、この人々は、あなたがわたしを遣わされたことを知りました。そして、わたしは彼らにあなたの御名を知らせました。また、これからも知らせます。それは、あなたがわたしを愛して下さったその愛が彼らの中にあり、またわたしが彼らの中にいるためです。」

(ヨハネ 17:1、4-6、9-26)

J・C・マコーレイはこの祈りを「聖書の中でも聖なるものの中の聖なるもの」と呼んでいます。私たちは、弟子たちと同様、私たちの救いのために神ご自身による捧げものがなされる直前の、父なる神と子なる神の間にある親密な交わりに聴き入るのです。そのような祈りを分析することなど、そのような場面にはほとんど無関係

に思われますが、この祈りの内容にしっかりと身を委ねてこそ、その意味を十分に味わうことになるのです。私たちはこの祈りに、個々の活用や単語を切り分ける文法や語彙の専門家としてではなく、礼拝者として近づくのです。

この祈りに際し、主の思いは次の三つの主要な関心で占められています。

- ① ご自分の栄化（115節）
 - ② ご自分の直接の使徒たちのグループ（6-19節）、
 - ③ やがて生まれこようとしている多くのクリスチャンたち（20-26節）
- の三つです。

この祈りの最初の部分（1-5節）におけるイエスの中心的な関心と最大の願いは、ご自分の栄化です。「世界が存在する前に」（5節）ご自分をご存じであった状態、しかしながらこの地上を旅する間は脇に置いておられた状態が、回復されることを予期しておられるのです。

「栄光で輝かせる」という言葉は、ギリシア語の「ドクサツォー」の翻訳ですが、これは「ほめる」「栄誉を与える」「たたえる」「栄華を身にまとわせる」といった意味です。この栄化への願いの深さについては、主ご自身が次のように祈る中で示しておられます。「今は、父よ、みそばで、わたしを栄光で輝かせてください。世界が存在する前に、ごいっしょにいて持っていましたあの栄光で輝かせてください」（17:5）。「栄光」という言葉は、どのような場面で用いられるかによって、無数の側面や意味、様々な適用を含むものですが、ここではそれをご自分が父なる神と分かち合っておられたご栄光に適用しておられます。

パウロがイエスの謙遜（ピリピ 2:5-8）、すなわち脱・栄化について生々しく描いている箇所についても考えてみましょう。そこでは、少し理解しにくい形ながらも、そのご栄光を、贖いという使命のために脇に置いておられます。キリストはこの祈りの時点で、ご自分の受難はまだ先ではありながら、その使命を既に達成したものとみなしておられるのです。イエスは、様々なご期待の中でも最高のもの、すなわち、ご自分の再栄化と父なる神の御座への帰還を心待ちにしておられたのです。そして、現在はまさに、神であり人である方として天に留まっておられるのです。

ここで見過ごしてはならないことは、イエスの再栄化の必要性です。イエスが本来あるべき姿に戻るのを待ち望んでおられたのは、単なる自己中心的な願望ではありません。最初にそのご栄光を失われたことが世の救いにとって本質的なことであったように、再びご栄光を得られたこともまた、その御体である教会の益にとって本質的なことであったのです。ヨハネによれば、イエスの栄化は、慰め主、あるいは助け主としての聖霊のご降臨に先立つものでなければなりませんでした。「イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、御霊はまだ注がれていなかったからである」（ヨハネ 7:39）。

私たちは、イエスと同様、栄化を祈り求めるべきでしょうか。J.C.マコーレイは次のように考えました。「そのような求めは、どのような状況にあっても、私たちの唇に上らせるものとしてはまったく不適切で外的なものである」。それでも私たちは、このような祈りは、ある意味、受け入れられるものなのではないかとも思います。というのも、パウロは次のように記す中で、人間の栄化というものにも焦点を当てているように思われるからです。

被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています。そればかりでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、子にさせていただくと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます。(ローマ 8:21-23)

パウロはまた、こうも語っています。「私たちは土で造られた者のかたちを持っていたように、天上のかたちをも持つのです」(I コリント 15:49)。ここで示唆されているのは、クリスチャンが栄化されるといっても、それは、イエスが天に帰られ、まさに神としてのいと高きところに戻られた時に栄化されたご様子とはまったく違うということです。私たちはまた、そのような栄化を求めて祈るべきでもありません。この箇所が勧めているのは、現在、イエスに似た者となることを求めて祈るべきだということであり、永遠を通じて継続的な栄化を体験していくこと(ピリピ 3:21 参照)を求めて祈るべきだということなのです。

イエスの祈りの二番目の部分(6-19 節)は、保護のための祈りと表現できるかもしれません。第一に、イエスは、ご自分に最も近しく従ってきてくれている人々が聖なる親密な関係に導き入れられてきた過程を思い起こしておられます。「彼らはあなたのみことばを守りました」(6 節)。「それは、あなたがわたしに下さったみことばを、わたしが彼らに与えたからです。彼らはそれを受け入れ……」(8 節)。ここでの教訓は明らかです。最も高い啓示を求める人々、天の領域への洞察を求める人々には、果たすべき役割があるということです。彼らは神のみことばを受け入れて従わなければならないのであり、そのみことばを与えてくださった方を信じなければならないのです。

この祈りの焦点は、世ではなく弟子たちにあります。「わたしは彼らのためにお願いします。世のためにはなく、あなたがわたしに下さった者たちのためにです」(9 節)。このくだりは「今」という言葉を挿入すると意味がわかりやすくなるかもしれません。「わたしは [今] 彼らのためにお願いします」。この時点におけるイエスのとりなしは、ご自分に既に与えられていた人々、イエスに信頼することを既に選択していた人々に焦点を合わせたものでした。これは、あらゆるクリスチャンにとって、なんと大きな慰めでしょうか。

数年前のことです。ある一頭の有名な競走馬がいました。この馬は全国で最も価値のある馬だと考えられていました。馬の管理者はその価値を声高に宣言し、その馬には昼も夜も人間の監視の目が光っていることを知らせようとしました。しかし、主にとっては、私たちこそはるかに貴重な存在です。私たちには永遠の価値があるからです。主の目は常にその子どもたちに注がれています。キリストの関心の中心は、世を去られた後もご自分に属する者たちを守るというところにありました。ご自分が彼らのうちに、また彼らを通じて始められたお働きは、継続されなければならなかったのです。パウロもまた、自分に直接従ってきていた人々について、同様の心配を語っています(使徒 20:25-32 参照)。

人の魂を扱う指導者は常に、たとえ距離的に遠く離れることになっても、キリストのために自らが接してきた人々については気遣いを示す者でなければなりません。イエスにとっての、弟子たちを守る方法は、その願いの内に示されています。「あなたの御名の中に、彼らを保ってください」(17:11)。イエスはそれまで、彼らを守り続けてこられていました。たとえ彼らが、自分たちこそが主をお守りしてきたのだと思っていたにしてもです。

ここに至り、その砦が取り去られると、彼らは自分たちの真の敵の繰り出すけたたましい攻撃を感じるようになる。しかし、命の言葉はなお、彼らの内に生きていた。そして、これら貴重で強力な言葉と、

守りの主体が父なる神に戻ったことにより、イエスに属する、粗野で恐れに満ちた小さな冒険家集団は、靈的戦いのノルマンディーとでも呼べる日を乗り越えるところとなったのであり、全世界を揺り動かす、信仰の強力な勇者たちの、強大で戦意あふれる軍勢として奮い立たせられるところとなったのである。

12節から15節までは、御子が始めたことを御父が継続してくださるようという願いになっています。私は彼らを守ってきました。これからはあなたがお守りください、という願いです。「わたしは彼らといっしょにいたとき、あなたがわたしに下さっている御名の中に彼らを保ち、また守りました。……彼らをこの世から取り去ってくださるようというのではなく、悪い者から守ってくださるようお願いします」(12、15節)。ここに、あらゆるクリスチャンにとっての励ましがあります。守られたいと願う人はみな、守っていただけるのです。同様に、守られないことを意図的に選び取る人が守られることもありません。「滅びの子」(12節)、すなわちユダが守られることがなかったのは、神の定めによるのではなく、自らの意志によってその道を選んだからでした。「私たちがここで意図しているのは、神は、ユダの犠牲など無くとも、ご自分の目的を達成することがおできになったということである。しかしながら、ユダやカヤパ、ピラト、群衆——そして疑うまでもなく、私たちがもしもその場にいたなら私たちもまたそうであったであろう——もまた、そこに喜んで手を貸したのである」。

人生の問題から逃げることは、イエスご自身の思いの中にはありませんでしたが、時として、イエスに従う人々の心を悩ませるものとなります。私たちも、闘うよりも逃げるほうがはるかに良いと考えるのです。厄介なこの古い世界よりも、栄光に満ちた新しい世界のほうが、はるかに良いと考えるのです。パウロはこの葛藤をうまく描写しています。「私は、その二つのものの間に板ばさみとなっています。私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。実はそのほうが、はるかにまさっています。しかし、この肉体にとどまることが、あなたのためには、もっと必要です」(ピリピ 1:23-24)。同じように、敵意と悪の満ちた世界が、暗い脅威である一方で、クリスチャンこそが、その暗闇を追い払うのに必要な手段として存在しています。だからこそ、イエスの祈りは私たちの祈りの模範となっているのです。

イエスが関心を抱いておられることの三番目には、私たちも含まれています (20-26節)。「彼ら(弟子たち)のことばによってわたしを信じる人々のためにも」(20節 括弧内著者)とあるように、イエスは、教会時代のまさに終わりの時代も含め、ご自分の直接の環境をはるかに超えたところにある人々にも関心を抱いておられました。私たちが意識しているといないとにかかわらず、この祈りは、はるか今日を生きるクリスチャンたち一人ひとりのもとにも届いているのです。私たちの祈りは通常、現代という時代に限定されており、せいぜい自分の生きている期間に限られています。ここでの教訓は、私たちもまた、自らの世代を超え、あらゆるクリスチャンを思い描きつつ、世の終わりへと祈りのビジョンを膨らませられるのではないかとということです。レイ・C.ステッドマンは自らの関心を次のように表現しています。「イエスの求めておられる事柄の、吸いつくようなリアルティー、すなわち、語っておられることの切迫した実用性についての何かをいかに表現すればいいのか」。ステッドマンは続けます。「これらのお言葉を、私たちはその親しさと美しさに魅惑されてしまい、イエスが現実にはこの箇所で自分たちのために祈ってくださっているのだということを悟りそこね、美しい詩や感動的なドラマに耳を傾けるかのように聴いてしまうのではないかと恐れている。イエスは、弟子たちのために祈っておられることを、私たちのためにも祈ってくださっているのである」。

ここではとりなしの範囲が広がっています。この祈りの前半で、イエスは、世のために祈っているわけではないと宣言しておられますが(9節)、ここでは明確に世のことを意識しておられます。「そのことによって、あなたがわたしを遣わされたことを、世が信じるためなのです」(21節)。キリストのとりなしは、第一にはクリス

チャンのためのものですが、それはまた、罪人が神の御子とその贈いの御業への信仰を通してクリスチャンとなることを認識したものであるのです。

御子のご栄光を理解するということは、「あなたがわたしに下さった栄光」(22節)という、御父と御子の一致のまさに本質を理解するということです。栄光とは現れ、すなわち、神のご性質、ご性格、存在の、現れであると定義することができます。それは、神の御姿のうちに反映されているのです。イエスは、ご自分と父なる神を一つとしているこの栄光こそが、ご自分に従う者たちについても同じく、三位一体の神との交わりにおいて、かつ、彼ら同士の交わりにおいて、彼らを一つとするものとなると理解しておられました。「私たちはみな、……栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます」(Ⅱコリント 3:18)。神のお姿とご栄光とが、自分自身の内に、また、キリストの御体にある全員のうち形成されていくようにと願う以上に優れた祈りを、私たちは祈れるでしょうか。神のお姿がその子どもたちの間に完全に反映されていくということ——不信仰な世界の耳目を集めるに、まさにこれ以上の強力な手段は無いのです。

神のご性質に固有のもの——それは超越的な愛です。この愛がイエスを信じる者の間に具体的に示されるならば、それは神が御子をご自分の愛の表現として遣わされたことを世が確信するところとなる——イエスはそう考えておられました。ここに伝道の無二の方法が存在するのです。クリスチャンの内に、クリスチャンの間に、そしてクリスチャンを通して現された、神の愛です。イエスにとってさえそうであったように、この神の愛を罪人のもとへと携えていくことこそ、あらゆるクリスチャンにとっての祈りの関心であるべきなのです。